様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成　２５　年　６　月　７　日現在

機関番号：32414
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2010～2012
課題番号：22520687
研究課題名（和文）　帝国日本の「外地」における相撲の受容と大相撲の「国技化」に関する調査研究
研究課題名（英文）　Research of *Sumo* in “*Gaichi*” (Colonies and Japanese-occupied Lands) --- from a Viewpoint of “National Sport”.
研究代表者
胎中　千鶴（TAINAKA　CHIZURU）
目白大学・外国語学部・教授
研究者番号：30550818

研究成果の概要（和文）：
本研究では、近代における「国技としての相撲」をめぐる現象と言説について、これまで相撲史において言及されることが少なかった植民地・占領地など、いわゆる「外地」との関係性という視点から考察を試みた。その結果、「国技」成立の歴史的・政治的背景や帝国ナショナリズム分析、外地における「国技相撲」の実態解明について、多くの点が明らかになり、一定の成果を得た。

研究成果の概要（英文）：
This research examines rudimentarily some phenomena and discourses over “*sumo* as a national sport” in modern time from a relative viewpoint with “*gaichi*” such as colonies and Japanese-occupied lands. This point has been almost neglected in the *sumo* historians.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２０１０年度	700,000	210,000	910,000
２０１１年度	600,000	180,000	780,000
２０１２年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総　計	1,900,000	570,000	2,470,000

研究分野：日本史
科研費の分科・細目：東アジア史
キーワード：相撲・台湾・植民地・国技

１．研究開始当初の背景

本研究は、植民地や占領地など、いわゆる「外地」に支配者から一方的にもたらされたであろう日本固有の技芸である相撲が、その社会に浸透し、受容されていく契機と経緯を検証したものである。これは、現在の日本社会に戦前から連続して息づく植民地主義的な心性や言説について、歴史学的に解明しようとする動機と構想に基づき開始されたも

のである。

２．研究の目的

本研究は、帝国日本の植民地（台湾・朝鮮）および占領地（満州国・南洋群島）において、日本の伝統的な娯楽競技である相撲が、当該地域にいかなる経緯を経て持ち込まれたのか、また当該社会の人びとにどのように受容されたのかを明らかにし、「外地」社会の歴史文化研究に新たな視座を提示することを第一の目的としている。

それはまた、1920年代に「国技」と自称した大相撲が、満鮮巡業や軍隊慰問など、戦時期の「外地」と関わる諸活動を通して実質的な「国技化」を果たし、一定の社会的認知を獲得していく過程としてとらえることもできる。

本研究の第二の目的は、大相撲の「国技化」の経緯を、「内地と外地」という二つの視点から考察し、そこから現代の日本社会に連続するナショナルな社会的心性の一端を解明することにある。

３．研究の方法

(1)大相撲の台湾・朝鮮・満洲巡業に関する調査

すでに明治期から昭和期に至る台湾における相撲興行の関連史料収集は作業が進行しているが、戦時期の朝鮮・満洲巡業については、アウトラインは把握しているものの、協会側の意図や政界との関係など、実施の背景に関する調査は未着手であった。そこでまずは国内の調査に比重を置き、巡業の全体像を明らかにした。

主な調査対象はａ．相撲博物館（両国国技館内）所蔵の史料閲覧と複写、ｂ．国会図書館ほか国内の図書館所蔵の相撲雑誌や体育雑誌の史料閲覧、などである。

(2)1910～30 年代の八尾秀雄の活動に関する調査について

八尾秀雄の台湾における活動については、関係史料の整理がなされておらず、詳細が明らかではない。これまでも台湾の国立中央図書館台湾分館を中心に、当時台湾で刊行された体育雑誌、教育雑誌から八尾の関係史料を収集したが、量的に不足しており、断片的な史料集積の域を出ていなかった。彼が植民地台湾の相撲教育の第一人者であることは確かであるため、本研究でも継続的に調査をおこない、その活動実態の解明を進めるべきであると考えた。

４．研究成果

(1)大相撲の台湾・朝鮮・満洲巡業に関する調査について

戦時期（1930～40 年代）の外地における大相撲興行に関する資料・文献の収集と分析をおこなったことにより、これまで明らかではなかった興行の内容や実施背景について体系的に検証することができた。

その結果、戦時期の外地における大相撲興行は、「国技による国威発揚」という使命を帯び、戦地の日本人に対する慰問を兼ねたものであると同時に、当時の相撲協会にとっては、確実に観客を動員できる新たな活路としてとらえられていたことも判明した。

また戦時期の大相撲は、一方で国策に基づく「国技」として外地に進出し、異民族教化の役割を果たそうとしたが、一方で戦時期随一の国民的娯楽として、外地の日本人社会に熱狂的に受け入れられている。「国技」と「娯楽」という、一見矛盾する二つの側面に着目することが、当時の大相撲を歴史学的な側面

から理解する際に必要不可欠であることを本研究は明らかにした。

(2)1910～30 年代の八尾秀雄の活動に関する調査について

八尾秀雄は、戦前・戦時期に、近代的な体育理論と国粋主義的な精神性を結合し、独自の相撲教育メソッドを確立したアマチュア相撲指導者である。その積極的な普及活動は、彼の出生地である植民地台湾のみならず、内地や満州でもおこなわれ、現地の学校教育現場に少なからず影響を与えた。

本研究では、これまでほとんど明らかにされてこなかった八尾秀雄の活動経歴を、台湾や内地で発行された新聞・雑誌記事を中心に資料収集・分析を進めたことにより、時系列に整理することができた。その結果、調査前の予測以上に、八尾秀雄が原理的な国技相撲の啓蒙と普及に関して大きな役割を果たしていたことが判明した。

同時に、そうした彼の活動は、戦時期にもかかわらず旧来の娯楽色を払拭できずにいた大相撲界にとって、相撲協会の「国技相撲普及団体」としての地位を揺るがしかねない脅威に映ったため、八尾と相撲協会のあいだには、鋭い対立が生じたことも明らかとなった。

相撲協会との確執から、八尾は 1940 年に満州に渡り、元力士の和久田三郎とともに相撲教育の専念し、力士の階級制度の導入や、行事制度廃止などの革新的なルール規定を作成し、「角道」という新しい国技相撲の概念を打ち立てようとした。多民族社会の満州で、白紙の状態から彼らがめざしたのは、「身命を捧げて君国にご奉公を尽くし得る実行力を養成すること」を使命とする、より原理的で先鋭的な国技相撲の扶植だった。

このように、八尾秀雄の活動理念と、それにともなう言動は、植民地や占領地という、眼前に異民族の被支配者がいる局面に置かれたからこそ生まれた相撲観、国技観であった。

本研究では、近代の相撲が「国技化」していく経緯を検証するとともに、こうした八尾の言説を追ったことで、現在の日本社会で一般に流布する「国技観」に通底する帝国ナショナリズムの一端を、相撲という娯楽的な技芸を切り口に考察することができた。

しかし本研究では、戦時期の外地に含まれる南洋群島での相撲教育や、日中戦争期の中国戦線における大相撲の皇軍慰問など、本来は着手するはずだったいくつかのテーマを積み残したままである。

今後も本研究のテーマを継続・発展させ、より網羅的に近代相撲の国技化について歴史学的観点からみていきたいと思っている。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計３件）

① 胎中千鶴、帝国日本の相撲　外地から観た「国技」と大相撲、現代思想、査読無、38 巻 13 号、2010、184-202
② 胎中千鶴、「外地」と相撲－「国技」をめぐる一視点、目白大学人文学研究、査読有、7 号、2011、117-135
③ 胎中千鶴、植民地台湾の相撲－興行と「国技」－、目白大学人文学研究、査読有、8 号、2012、113-131

〔学会発表〕（計２件）

① 胎中千鶴、八尾秀雄の台湾経験、国際日本文化研究センター共同研究会「植民地帝国日本における支配と地域社会」、2011 年 1 月 23 日、国際日本文化研究センター
② 胎中千鶴、日本統治期台湾における相撲、国立台湾図書館国際学術シンポジウム「近代東アジアにおける台湾」、2013 年 3 月 16 日、国立台湾図書館

〔図書〕（計１　件）
① 胎中千鶴、他、思文閣出版、地域社会から見る帝国日本と植民地、2013、647-681、

〔その他〕
・エッセイ
① 胎中千鶴、植民地台湾と相撲、歴史と地理、659 号、2012、51-14
② 胎中千鶴、戦時期の「国技」と大相撲、鴨東通信、89 号、2013 年、6-7

６．研究組織
(1)研究代表者
胎中　千鶴（TAINAKA　CHIZURU）
目白大学・外国語学部・教授
研究者番号：30550818

(2)研究分担者
なし

(3)連携研究者
なし